

平成26年度 学生による地域活性化プログラム
高橋治道ゼミナール活動報告書

地域の魅力発信 による絆結び

— 神谷の魅力をつなげ・ひろげる —

平成26年度

06

ごあいさつ



学長 内藤 敏樹

継続は力なりと申しますが、今回で8年目を迎えた地域活性化プログラムにこの言葉があてはまるでしょうか。指導教員が入れ替わったりテーマが変わったりで、最初から同じテーマで続いている取組はそれほど多くはないのですが、学園祭などで8年間の成果を一覧できるようになっていたりするのを見るとちょっとした壮観です。昨年度から文科省の「地（知）の拠点整備事業（COC）」の一環としての位置づけがなされ再スタートしましたが、当初の意気込みが指導教員によみがえったのではないかと期待しています。

地域活性化プログラムは、学生が地域の中に入って行って地域の課題を解決していこうとするものですが、その実は地域による学生生活活性化プログラムでもあります。つまり我々教員が講義やゼミ各種の演習を通じて学生を教導するだけでなく、さまざまな形で地域の方々と接し、時に怒られ時には褒められるという体験を積むことによって学生が実社会に出た時の「コミュニケーション能力」を飛躍的に伸ばせる可能性が期待されているのです。

またプログラムはチームで共同作業を行うものなのですが、率直に言ってメンバー間にはいろいろと温度差があります。時間を守らない、割り当てられたタスクをちゃんとやらない等さまざまなドタバタが起きていること、これも実社会の縮図であるかと思えます。こうした困難を乗り越えることを通じて成長していく学生が増えています。

これまでのプログラムの中で学生と地域の方々がいろいろな形で接触し、さまざまな活動を行ってまいりました。中には「若い学生さんが地域の中に入ってきてくれるだけで充分です」というご意見もありましたが、さらにプラスしてもっと地域のためになることをしなければならぬと考えています。

本学は開学以来、「去華就實」「社会に役立つ人間となれ」をモットーとしています。ただ役に立つかどうかを決めるのは社会であり他人です。ここで独りよがりがあったり、根拠のない独善があったりしたのでは真に「役立つ」人間にはなれません。つまり上のモットーは、自らに対する客観的な認識に裏付けられた自身が必要になってくるということです。いろいろな人たち—関係者から率直な評価をもらえることは、成長途上の学生にとって得難い機会であるかと思えます。あとはその評価をどう活用していくかということですが、この点はまだ学生次第ということになりますので、このあたりも我々は考えていかねばならない点であるかと思っています。

地域交流、実社会との連携を行っている教育機関は他に数多くあると思います。東日本大震災の後も、被災地の支援を正課の中で取り上げた大学があると報告されています。ただ、本学のような形で長期間地域との関係を築き上げているものはあまりないのではないかと自負しています。地域の方々、特に学生と接することになる各位にはご迷惑なことかも知れませんが、次世代の若者の成長のためによりしくお願いする次第であります。

平成27年3月

はじめに

—地域の魅力発信による絆結び— ～神谷の魅力をつなげ・ひろげる～



長岡大学教授／ゼミ担当教員 高橋 治道

高橋ゼミは、地域に根差した大学づくりを目指す長岡大学が平成19年文部・科学省の“現代的教育ニーズ取組支援プログラム”に採択された「学生による地域活性化提案プログラム」（現在は「学生による地域活性化プログラム」；長岡大学の独自教育プログラム）に「安全・安心・文化的なまちづくり」をテーマにして参加以来、今日まで一貫して“豊かで安全で安心して暮らせる地域づくり”を一貫した基本テーマとしてプログラムに参加しています。

活動当初は、長岡市が平成18年に策定した「長岡市総合計画前期基本計画」の中の「安全・安心」に関する基本施策の具体化に取り組みました。取り組みの中で行った若者へのアンケートで“豊かで安全で安心して暮らせる地域づくり”の基本は「地域コミュニティづくり」ではないか”とのコメントが書かれていました。

そこで、平成21年から現在に至るまで「地域コミュニティを中心とした安全・安心」を中心テーマにして、長岡市神谷地区を拠点にして活動を行っています。長岡市神谷地区は、旧三島郡来迎寺村一帯の大地主である高橋家と旧来迎寺村役場があったことから歴史的遺産や建造物が豊富にあり、かつ地域コミュニティの機能がしっかりしていて地域全体の一体感が強く、そのうえ行政に頼るのではなく自分たちの手で地域づくりを行うことを積極的に推進している地区です。

神谷地区での活動初年度は、地域活性化の指針を明らかにすることを目的にして地区の主だった人や諸団体へのヒアリング調査を行い、地域活性化の五つの要因を明らかにすることができました。

平成22年度は、神谷地区からの要請で、神谷地区に現存する歴史的建造物の“旧神谷信用組合の建物”と“耕作されずにいる畑”の活用方法についての取り組みを行い、“旧神谷信用組合の建物を拠点とした畑の貸し出しシステム”の提案をしました。この活動を行う中で神谷地区に居住した水島義郎氏が、明治37年に新潟県で初めてチューリップを自宅の庭で咲かせたという史実を知りました。

平成23、24年度は、“神谷が新潟県チューリップ初開花の地である”ことや歴史建造物である“旧神谷信用組合”の建物、“旧来迎寺村一帯の大地主であった高橋家”が関係するもみじ園等の施設、神谷地区内の歴史的資産などをまとめて紹介する“神谷情報マップ”作り、“新潟県チューリップ初開花の地”であることを知らせる看板の設置、チューリップの植栽を中心にした活動を行いました。

平成25、26年度は、神谷地区の子供たちの地域の自然を体験し、地域の自然の素晴らしさを再認識してほしいということで、神谷地区内を流れる“須川”をEボートで下るイベントを企画しました。このイベントへは、7歳から80歳までの延べ30人の神谷の住民の方が参加され、この模様はNHKのクローズアップ現代の中で全国放送されました。

学生たちは、自分達が設定した活動テーマを神谷で実践する傍ら、観桜会、どろんこ田植え、運動会、秋季大祭、収穫祭、さいの神等の神谷地区の行事へも積極的に参加し、地域の人達との交流も積極的に進めています。こうした活動を通して、それまではひきこもりがちだった学生が両親もびっくりするくらいに活動的になり、社会に巣立って行くなどの成果が生まれています。

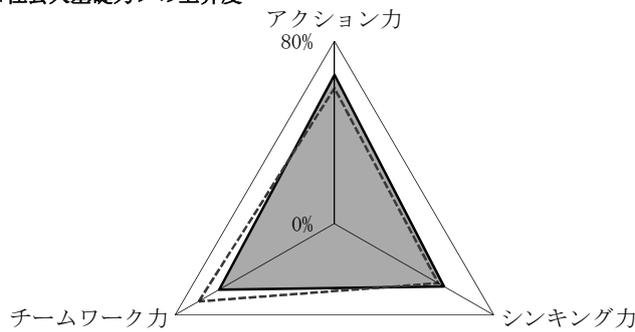
核家族化し、幅広い年代の人と胸を開いて接する経験がほとんどない学生たちにとって、このプログラムを通して多くの社会人の方から学ぶことの意義は非常に大きく、社会人基礎力育成にとってかせない教育プログラムとなっています。

平成27年3月

平成 26 年度 学生による地域活性化プログラム 社会人基礎力の上昇度

地域活性化プログラムにおける学生教育の目標は、社会人基礎力の向上、ビジネス展開能力の向上、専門的スキルの向上が目的である。平成 26 年度学生による地域活性化プログラムに参加した 10 取組の学生の「社会人基礎力」の伸び具合について、学生とゼミ担当教員にアンケートを実施した。アンケートは取組に参加した学生一人一人を対象に、社会人基礎力の変化を評価する形で実施した。学生は自己評価（有効回収 69）であり、教員は各ゼミ生についての評価である。

<社会人基礎力>の上昇度



★「社会人基礎力」

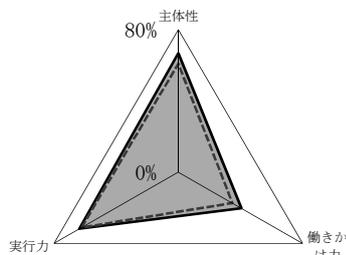
＝「アクションカ」「シンキングカ」「チームワークカ」が上昇

3つの社会人基礎力の上昇度（取組前と取組後の比較）は、学生の自己評価と教員評価の間にずれがある。今後の取組においては、今年度の結果に現れている学生評価と教員評価の差を小さくすると同時に全体的な上昇度を高めていくことに対して、継続的に検討していく必要がある。

※図の網かけ ■ は学生評価、点線 □ は教員評価である。

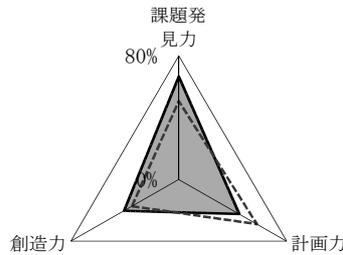
	学生評価	教員評価
アクションカ	65.2%	59.4%
シンキングカ	55.1%	52.2%
チームワークカ	58.0%	68.1%

<アクションカ>の評価



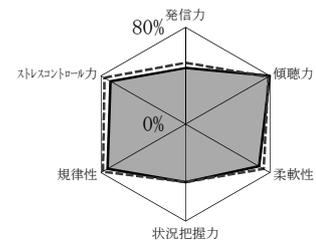
	学生評価	教員評価
主体性	66.7%	60.9%
働きかけ力	40.6%	34.8%
実行力	63.8%	62.3%

<シンキングカ>の評価



	学生評価	教員評価
課題発見力	66.7%	50.7%
計画力	44.9%	58.0%
創造力	40.6%	34.8%

<チームワークカ>の評価



	学生評価	教員評価
発信力	46.4%	50.7%
傾聴力	79.7%	78.3%
柔軟性	69.6%	73.9%
状況把握力	47.8%	47.8%
規律性	73.9%	78.3%
ストレスコントロール力	71.0%	76.8%

<アクションカ>

アクションカの3つの指標を比較すると、今年度の学生の場合、主体的には取り組めたと思っている学生の割合は高いが、教員の評価は低くなっている。学生はそれなりに積極的に活動していると感じている一方で、教員はもう一歩踏み出してほしいという期待感を持っているようである。

<シンキングカ>

学生の自己評価では、課題は見つけれられたが、自分で計画して課題に立ち向かい、課題解決ができた学生は残念ながら少なく、また創造力が低くなっている。同様に、教員評価でも創造力については厳しいものになっている。シンキング力が弱い傾向があり、この点をどのようにして伸ばしていくかが課題として残った形である。

<チームワークカ>

チームワーク力は、「アクションカ」や「シンキングカ」よりも学生評価と教員評価の類似性が高い。

学生の自己評価も同様であるが、教員の評価が発信力と状況把握力が低い点は、今後指導を強めていく必要がある。



平成26年度 学生による地域活性化プログラム

地域の魅力発信による絆結び

— 神谷の魅力をつなげ・ひろげる —



■担当教員
高橋治道

■ゼミ学生

4年生：伊藤健宏 太田愛実 國松優樹 古田島夏希 羽賀雄介 星田周哉
水品拓郎 大山真実

3年生：八藤後諒 今井大介 岡田孝

■アドバイザー：白井湛氏（長岡市 神谷区長）、
桑原真二氏（NPO 法人ながおか生活情報交流ねっと 理事長）

取組みの目的

長岡市神谷地区（旧越路町神谷地区）をモデルとして、地域に残る自然、文化・歴史、歴史的建造物などの資産を守りながら地域の活性化と次世代への継承を図る方策を試みる。今年度は、昨年度実施できなかった「Eボートによる須川下り」の実現を第一目的とした。また、神谷が「新潟県初のチューリップ開花地」であることを長岡市民に広めることを目的に、長岡市民の間における認知度の調査と神谷の地におけるチューリップ植栽活動を行う。

取り組みの成果

神谷地域に残る有形無形の歴史的建造物や伝統文化等を生かした地域活性化策を考える中で、参加学生自身が自分の生まれ育った地域を新たな視点で見つめなおし、地域コミュニティに参加して行く姿勢を学ぶことができる。また、取り組みの企画・実行、地域住民との交流を通して、シンキング力、アクション力、コミュニケーション力などの社会人基礎力を身に着けることができる。

【活動の写真集】

Eボート下見会の様子



運動会



活動の枠組みと方法

昨年度からの「地域の魅力発信による絆結び」活動を引き続き行うこととし、一つは、2・5年度に実現できなかった「Eボートによる須川下り」の取り組みに再チャレンジすることとした。また、これまでの先輩が取り組んできた活動の成果を踏まえながら、神谷が「新潟県初のチューリップ開花地」であることを長岡市民に広く知らせるための活動を引き続き行うこととした。Eボートの活動は、これまでの活動の継続性から4年生が担当し、チューリップにかかわる活動を3年生が行うこととし、二つの班（Eボート班、チューリップ班）を設定した。

各班が独自に活動を行うと共に、地域の行事には積極的に参加し、神谷の人たちとの交流を深める活動も行う。

活動の概要

Eボート班

・昨年度、Eボートを借りるができず、実現できなかった“神谷の中を流れる「須川」をEボートで下る”企画に再挑戦した。今年度は、須川の河川使用許可、Eボートの操船と安全講習会など、川下り当日までの諸課題を情報共有システムも使いながら議論・解決に向けて取り組んだ。10月18日に実施した川下りの様子は、10月22日にNHKの「クローズアップ現代」で全国放送された。

チューリップ班

・神谷が「新潟県初のチューリップ開花地」である認知度調査を10月19日に越後丘陵公園で行い、7・8名から聞き取りを行った。
・「新潟県初のチューリップ開花地」をアピールするチューリップ植栽を神谷の住民が主体となった活動にすることを目的に「チューリップ植栽活動への参加呼びかけ」のチラシを回覧板で回覧した。11月18日の植栽日は、神谷の住民4名も参加された。この様子は、11月22日の新潟日報朝刊で報道された。

その他

・観桜会、どろんこ田植え、いかだ修復作業、神谷区民運動会などの行事へ参加し、神谷の人たちとの交流を深めた。



チューリップの植栽



丘陵公園での認知度調査



観桜会

平成26年度 学生による地域活性化プログラム

地域の魅力発信による絆結び

～神谷の魅力をつなげ・ひろげる～

高橋治道ゼミナール

4年生

11M012 太田愛実
11M021 國松優樹
11M024 古田島夏希
11M044 羽賀雄介
11M049 星田周哉
11M050 水品拓郎
11M063 大山真実

3年生

12E033 八藤後諒
12M001 今井大介
12M005 岡田 孝

1. はじめに	
1.1 取り組みの趣旨	1
1.2 活動概要	1
1.2.1 E ボート班の活動	
1.2.2 チューリップ班の活動	
1.2.3 地区行事への参加	
2. 神谷地区行事参加	
2.1 観桜会	4
2.2 どろんこ田植え	4
2.3 運動会	5
2.4 いかだ修理	6
3. E ボート	
3.1 昨年度の活動の概要	8
3.1.1 上川西小学校教頭金子先生へのヒアリング	
3.1.2 長岡市民協働センター高橋秀一氏へのヒアリング	
3.2 昨年度の活動	12
3.3 今年度の取り組み	12
3.4 河川使用許可の取得	12
3.5 下見会実施に向けた活動	13
3.5.1 山下氏とのテレビ電話会議	
3.5.2 サイボウズ LIVE を使った情報共有	
3.5.3 下見実施に向けた最終打ち合わせ	
3.5.4 E ボート操船の役割分担	
3.5.5 使用する備品	
3.5.6 川下りの中で出来ることを考える	
3.5.7 収支計画・報告	
3.6 下見会実施	18
3.7 E ボート借用	20
3.8 広報活動	20
3.9 E ボートでの須川下り本番	21
3.9.1 タイムスケジュール	
3.9.2 川下り	
3.9.3 本番のまとめ	
3.9.4 今後の活動（課題）	
3.9.5 経費	
3.10 長岡市への提言	25

4. チューリップ

4.1 新潟県初のチューリップの開花地・神谷	26
4.2 チューリップ初開花地認知度調査	26
4.2.1 許可申請書の提出	
4.2.2 アンケート用紙の作成	
4.2.3 聞き取り調査の結果	
4.3 チューリップの植栽	31
4.4 植栽活動の今後について	33

5. 総評

5.1 各活動の成果・反省	33
5.1.1 地区行事	
5.1.2 Eポート	
5.1.3 アンケート調査	
5.2 活動全体の成果と反省	35
5.3 来年度に向けて	36

謝辞

引用・参考文献

1. はじめに

1.1 取り組みの趣旨

近年、少子高齢化や核家族化、若者の田舎離れなどの影響で農山村地域が活性化を失いつつある。そのような中、自分たちの生まれ育った地域の歴史や文化を守るとともに次の世代に伝えるために、住民自らが立ち上がり地域の活性化に取り組んでいる地域が増えてきている。

私たち「高橋ゼミナール」は、地域の資産を生かした住民による地域活性化のための取り組みを平成 21 年度から「地域活性化プロジェクト」の活動の中で行っている。具体的には、県や市などの地方自治体や国の手助けを待つのではなく、「自分たちの地域は自分たちで守っていく」という思いを一つにして地域活性化に取り組んでいる長岡市神谷地区（旧越路町神谷地区）において、地域に残された歴史的建造物、文化、歴史、自然などの資産を守りながら地域の活性化を図る方策について取り組んできている。

地域の文化・歴史・自然を守り、次の世代へとつなげていくことにより、その地域の魅力を守り受け継がせていくことができ、さらに新たな魅力を発見し発展させていくことで地域の活気も増え、さらなる活性化につながると考える。

そこで、神谷の魅力を知り・つなげて行くことで神谷の活性化を図る取組を行うことにした。そのためには、私たちが神谷地域を訪問して直接観察するとともに、神谷の人達をよく知ることが大切であると考え、神谷の方々との交流を深めることにした。次に、訪問や交流から知った魅力をどのように発展させ、どのように次につなげて行くのかその方策を考えることにした。

さらに、数多くの行事に参加させてもらうことで神谷の方々と親交を深めることができ、多くの方々と積極的に接することでコミュニケーション能力や目上の方に対しての接し方や言葉遣いについて学ぶことができることから、この活動を通して社会人基礎力を高めることを目指した。

先輩たちのこれまでの活動を通して、神谷地域の人の良さ、歴史、文化、自然などの多くの魅力を知ったことから、交流を単にゼミナール活動の一環として終わらせるのではなく、その枠を超えた親睦と友好関係を築く活動を行うことを目標とした。

1.2 活動概要

高橋ゼミナールは、2009 年以来、「地域の資産を生かした地域活性化」をテーマに、旧三島郡越路町にある長岡市神谷地区の地域活性化について毎年取り組んできている。これまでの先輩方の活動報告の資料などを見ていく中で、行ってきた活動の内容や神谷地域に関して興味を持ち、ものづくり（いかだ作りなど）やチューリップ植栽などのこれまでの成果をさらに発展させることを目指し、今年度も活動を行うことにした。

今年度、我々は、活動を通して現在神谷にはどのような魅力があるのかを見つけ、見つけたその魅力もとにさらに発展させた新たな魅力を見だし、その魅力を神谷の方々とともに創っていき、次の世代へとつなげていくことを目指した活動を行うことにした。

そこで、次の三つを今年の活動テーマとした。

- ①「神谷の魅力を知る」
- ②「神谷魅力を創り」
- ③「神谷魅力をつなげる」

これら三つのテーマもとで、4年生は昨年度の「地域の魅力発信による絆結び」活動を継続した「Eボートによる須川川下り」、3年生は「新潟県初のチューリップ開花地“神谷”」を広める活動を行うことにした。具体的には、4年生を対象とした「Eボート班」と3年生を対象とした「チューリップ班」の二班に分かれて活動を行った。

「Eボート班」は、自分の住んでいる地域の魅力を子供たちに発見してもらおうという目的で昨年度取組んだが実現できなかった「Eボートによる須川での川下り」の実現に取り組んだ。また「チューリップ班」は、新潟県初のチューリップ開花地を知らせ・広めるという目的で、神谷が初開花地としてとしてどの程度知られているか認知度調査を行った。

これらの活動を行うには、神谷地区の伝統や住民の方々との交流を深めることも大切なため、神谷の方たちと親交を深める目的で「観桜会、どろんこ田植え、運動会、いかだ修理」等の行事に積極的に参加した。

1.2.1 Eボート班の活動

神谷を流れる須川では、昔、子供たちは水遊びや魚釣りを楽しみ、大人たちは洗濯や野菜洗いをし、さらに古くは船で米などの物資を運ぶなど、神谷の方々にとって大切な生活の場であった。そんな神谷と須川のつながりの歴史を振り返るとともに、もっと須川と親しみ、神谷の自然を知ろうということで7年前から自作のいかだによる川下りが行われていた。

しかし、そのいかだが壊れてしまったということを知り、それならばいかだに代わるもので須川の川下りを楽しもうということで、Eボートによる須川下りを企画することにした。なぜEボートにしたかという点、Eボートは安全性が高いうえに操作が簡単で、初心者でも気軽に参加することができ、かつ大人数で連携して楽しむことができるからである。そのうえ、Eボートは、水害などの災害時にも使用されていることから、防災意識の向上にも役立つと考えたからである。

この活動では、普段須川と触れ合うことのない子供たちから、いかだの代わりにEボートを使った川遊びの体験を通してこれまで気づかなかった神谷の魅力を見つけてもらうとともに、須川の歴史に触れてほしいという理由で、次の目的を設定した。

- ① 須川の川遊びを楽しんでもらう
- ② 須川の歴史に触れてもらう
- ③ 神谷の自然を再認識してもらう

この目的は、昨年度の取り組みの時に決めたものである。しかし昨年度は、「国土交通省から須川の使用許可が下りていない」、「目的が曖昧である」、「安全面に不安がある」、さらに「越路支所にはEボートを指導できる人がいない」という理由でEボートの貸し出しを断られたために残念ながら実施を断念した。昨年度は、その後、2014年夏の実施に向けて計画を練り直し、実現のための課題抽出と抽出した課題解決に向けた準備活動を1年間行ってきた。

昨年度の失敗からは、計画性、時間、他者との連携などを含めた事前の準備がいかに大切かということがわかった。この失敗を経験したことにより改善策を考える力が身に付いた。

今年度は、昨年度行った課題解決に向けた準備活動から明らかにした問題点の解決を“長岡市民協働センター”へのヒアリングや“株式会社地域交流センター企画取締役の山下匡紀氏”とのテレビ会議を通して一つずつ行い、無事須川での川下りを実行することができた。

1.2.2 チューリップ班

チューリップ班は、新潟県初のチューリップ開花地を知らせ・広めるという目的を軸として、長岡市がチューリップ初開花地であることがどの程度知られているか認知度調査を行いその結果をまとめた。

1.2.3 地区行事への参加

神谷地区で開催される各種の行事に積極的に参加した。神谷の魅力を知り・つなげていくためには、まず我々が活動を通して神谷の魅力を知り、その魅力をどのように発展させ次につなげることができるかという考えで神谷の方々との交流を深めることにした。

数多くの行事参加をさせてもらい、神谷の人達の親切で誰をも気持ちよく受け入れる心などを知った。多くの方々と接することでコミュニケーション能力や目上の方に対する接し方や言葉遣いなど、同世代の学生中心の普段の生活の中ではなかなか学ぶことのできな事柄を学ぶことができた。

神谷地域での活動を通して、神谷地域の方々の方の良さ、歴史、自然などに魅力を感じた。この交流を単にゼミナール活動の一環として終わらせるのではなく、その枠を超えた親睦と友好関係に発展させゆけたら素晴らしいなと考えた。

2. 神谷地区行事参加

2.1 観桜会

4月20日に中央公園で開催された観桜会に参加した。老人会の人たちが多く参加され、若者や小学生たちの参加はあまりなかった。老人の人たちがブルーシートに車座になって和気あいあいとされているのに対して、若い人たちは焼き鳥等の裏方の作業を一生懸命にされていた。若い人たちはその作業をしているのは当然という感じで作業をされており、神谷の人達の人柄の良さを垣間見た気がした。

図表 1 観桜



2.2 どろんこ田植え

毎年5月に開催されている「どろんこ田植え」に高橋ゼミナールは、毎年参加している。今年も5月11日に開催された田植えに参加した。当日は神谷の小学生や親御さん、お年寄りの方など多くの方が参加されおり、神谷地区の結束力の強さを垣間見た気がした。

現在の田植えは機械化が進み、昔の様な手法で田植えをすることはなくなったが、このどろんこ田の田植えでは、ゴロと呼ばれる昔ながらの道具を使って苗を植える位置を示す印を田んぼにつけた後に、手で植えた。ゴロとは六角形の形をしていて、田んぼの中を転がして十字の印を付けて行く道具である。その付けられた十字の場所に苗を植えて行くため、手で植える時代の田植えには、欠かせない道具であった。

ゴロ押しが終わると小学生たちは早々と田んぼの中に入っていったが、私たちは田んぼを渡って吹いてくる風の寒さと水の冷たさでなかなか田んぼに入ることができなかった。しかし、いざ入ってみると田んぼの泥の中は、思ったよりも暖かく感じられた。慣れない

図表 2 田植えの様子



2.3 運動会

毎年神谷地区の子供からお年寄りまでが集まり、スポーツを楽しむイベントである。運動会の名の通り、かけっこ、パン食い競争、班対抗玉入れ、リレー等のたくさんの競技が用意されており、参加者全員が楽しめる内容になっている。なかなか顔を合わせられない大人たちもこの日ばかりはこぞって参加し、一緒に競技を行うことで交流を深め、絆を深めている。

今年は6月15日に神谷中央公園で行われ、5人の学生が参加させていただいた。参加者の足りない競技や応援参加を求められた競技に参加し、神谷の皆さんと交流することができた。

当日参加した種目と参加しての感想は、次のとおりである。

① 対抗玉入れ

神谷は16の班に分かれており、その班対抗の玉入れが行われた。勝ち抜き戦による対抗試合であるが、中には、メンバーの数がそろわない班があり、そのような班からの要請で学生も助手として参加させていただいた。

30秒の間に数多くの球を籠に入れたチームが勝ちという単純なゲームであったが、籠に玉を入れるのはなかなか難しかった。

図表3 班対抗玉入れ



② ビール早飲み

神谷の特徴ともいえるビール早飲みは、若い人だけでなくお年寄りまでもが参加する。中瓶ビール（お酒が飲めない人はペットボトルのお茶）を一本飲み切るまでは、ゴールへ走ることができない。神谷の方々、飲み振りの良い人が多く、圧倒させられた。学生が手にした瓶ビールが空き瓶で2本飲んだように見えたハプニングもあったが、なんとか飲み干し

図表4 ビール早飲み



ゴールすることが出来た。

③ パン食い競争

ある住民の方が食パンを狙っており、「とるなよ、とるなよ！」と言われていたが、ゼミ生の一人がとってしまった。ゴール後、その人にとって食パンをあげると「お前、いい奴だな」と言われ、代わりにジャムパンを頂くという場面もあった。揺れるパンに噛付くのは難しかったが、私たちも賞品をいただくことができた。

パン食い競争などの個人競技では、1位から3位までに賞品が出るため、みなさん特に真剣であった。

図表5 パン食い競



④ 瓶詰め

一升瓶に色水を湯呑みで運んで注ぎ、早く満杯にしたチームが勝ちという競技である。雑に色水を入れるとこぼれてしまうので難しく、奥が深いゲームだと思った。

⑤ リレー

リレーは全競技の最後に行われ、一番盛り上がりを見せた。声援が飛び交う中、子供から大人まで全力で走り、お年寄りも元気に走っていた。私たちもメンバーとして加わり、神谷のみなさんと一緒に走った。久しぶりに全力で走ったので疲れたが気持ちよかった。また、リレーという協力が必要な競技で神谷のみなさんと一緒に走ることで、一体感を感じることができた。

図表6 リレー



2.4 いかだ修理

神谷では、7年前から竹で作ったいかだを須川に浮かべて川遊びをしていた。

先生から、神谷で使用しているいかだが昨年の大水で壊れたため修繕するというお話を聞き、魅力作りの一環につながるものであるとともに、神谷の方々と一緒に作業を行うことで親睦を深めることができるのではないかという思いから、神谷造船倶楽部の発砲スチロール製のいかだ修繕作業に参加させていただいた。

修繕作業は7月20日に行われたが、修繕というよりは、もはや一から作り直しているようにも見える作業であった。修繕作業に取り組む姿からは、神谷の人達のいかだに対する熱心な想いがひしひしと伝わってきた。

私たちゼミ生は、修繕に必要な竹の調達を担当することになった。竹林に生えている竹をのこぎりで伐採するという一見地味な作業だが、長さや耐久性を考えながらなるべく真直の竹を見極めなければならなかったため、ある意味最も重要なポジションだった。伐採した竹は、枝を切り落として、いかだに使えるように加工した。

竹や板、発砲スチロールなどの素材を組み合わせることによって、作業開始から約3時間後に修繕（というよりは再製作）作業は完了した。神谷の方々に試しに乗るように言われたので実際に川に浮かべて乗ってみた。後に乗ったEボートと比べると安定感に欠けるが、自分達が苦勞して作り上げた物に乗った時の感動と達成感は筆舌に尽くし難いものがあった。

できれば、来年は、このいかだとEボートをタイアップした川遊びをしたいという気持ちが神谷の人達にはあるようだ。

図表7 完成したいかだ



3. E ボート班の活動

E ボートは空気を入れて浮かせる大きなゴム製のカヌー型ボートで、空気を抜けばコンパクトになり、運搬も手軽に行うことができる。さらに、環境教育を目的とした活用や、水害や事故などの緊急時対応を身につけるためにも使用されている。しっかりと危機管理をマスターした指導者がいれば、川や海と親しむツールとして最適である。

E ボートという名前の「E」は、everybody（誰でも）、easy（簡単に）、enjoy（楽しむ）など、E から始まる様々な単語が由来である。

3.1 昨年度の活動の概要

4 年生は、昨年実現することができなかった E ボートによる須川川下りに取り組んだ。昨年度の活動を継続したものであるため、初めに昨年度の活動を概観する。

昨年度は越路支所から E ボートの借用許可を得るため、神谷地区の区長さんのお力をお借りして、越路支所に話しをしていただいた。

しかし、「国土交通省から須川の使用許可が下りていない」、「目的が曖昧である」、「安全面に不安がある」という理由で、E ボートの借用許可を得ることが出来なかった。また、E ボートの指導者についても「支所には指導できる人がいない」ということであった。以上のことから、当初実施予定としていた 8 月上旬までに E ボートを使った須川下りを実施することは難しいと考え、実施予定を 2014 年夏に変更して計画を練り直すことにした。

実施に向けて計画を練り直す中、上川西小学校の子供たちが E ボートで信濃川下りを行ったことが新聞に取り上げられていた。成功事例に学ぼうと、上川西小学校の金子教頭先生に連絡を取り、7 月 25 日にヒアリングを行った。また、11 月 15 日には、その取り組みの支援を行った長岡市民協働センターの高橋秀一氏へのヒアリングを行った。実際に経験された方に直接お話をうかがって情報を得ることで、自分たちでは発見できなかった課題を見つけることができた。

その課題一つ一つに対してどう向き合って解決していったのかというお話は我々にとって大きな希望となった。

3.1.1 上川西小学校教頭金子先生へのヒアリング

7 月 25 日 E ボートによる信濃川下りを実施された上川西小学校教頭金子先生に、「どのように取り組み、川下りを実施できたのか」ヒアリングを行った

図表 8 ヒアリングの様子



以下、ヒアリングでの質問事項とそれに対する金子先生のお話を示す。

① なぜEボートで川下りをしようと考えたのか。

地域を故郷として感じる事ができてみんなでやるような行事は何かと考えた。信濃川でEボートを使って川下りをすることで、故郷と子供たちをつなげたいと思って企画した。

② 計画を実施するためにどのような協力体制を作られたのか。

教員だけではEボートを実行することができず、後援会長、PTA会長などとともに川下り実行委員会を作り、見込を立てて実行委員会が市に川下りの提案をした。地域の方や保護者にも安全面などの説明をして協力者を募集した。さらにコミュニティセンターからも声をかけてもらった。

③ 川下りの実施までにどのような準備をされたのか。

アオーレ長岡にある長岡市民協働センターの高橋さんから、Eボートのコーディネーターである山下さんを紹介してもらった。指導者の方は東京から招き、Eボートは長岡市から3艇、見附と越路から1艇ずつ計5艇借りた。カヌー協会からも、ライフジャケットとポンプを借りた。事前に川下り実行委員会で乗り方の指導や片づけも含め練習を行った。

Eボートのコーディネーターの山下さんや指導者を招くには費用がかかり、補助金だけでなく、参加者から一人1500円の参加費を徴収した。

④ 安全のために配慮された点は何か。

水難事故の防止やEボートの操作を指導者から、何回かに分けて教えてもらった。Eボートに乗るためには、素早い判断力と緊張感が必要であった。ボートの上は暑いため水分補給の水を用意した。また、引上げ用のロープも用意し、引き上げの人にもライフジャケットを着用してもらった。さらに、信濃川の危険な地点と着岸地点の安全性を確認した。指導者の言うことを聞けない人は乗せなかった。

⑤ 新聞によると「プールで子供たちがEボートやライフジャケットを体験した」ということだが、指示されて行われたのか、それとも自主的に行われたのか。

Eボートの貸し出しには、指導者の確保と安全指導は必要で、子供たちの安全確保は重要だった。事前の安全指導として、プールでEボートやライフジャケットを体験し、浮く練習をするなど、救助の練習をしながら水に慣れ親しむことを行った。

⑥ どのような手続きを踏んでEボートを借りられたか。

指導者の確保が絶対条件だったが、長岡市には居なかったため東京から招いた。企画書をまとめ、河川事務所を訪問し、Eボートを使用した川下りを信濃川で行う許可をもらえるように話し合いを行った。その際、Eボートをやる上での全ての質問に答えられるように準備した。

⑦ 計画を保護者に発表した際に、どのような反応があったか。

最初に伝えた時は驚かれた。そこでPTAの方々に、安全面などを説明して理解を得て、地域の方々とも協力することができた。

⑧ 計画を実施した後の保護者の方や子供たちの感想はどうだったか。

「川底を見ることができた」、「またやりたい」、「川下りをしてみて発見するものがあった」などの感想をいただいた。スタートが越路橋からで、距離約6.8km、所要時間約40分と長距離かつ長時間の川下りだったが、川に流れがあったため子供たちに疲れは見え、川下りに怖がることもなく楽しんでた。

上川西小学校の金子教頭先生へのヒアリングから、以下の5点が課題として明らかになった。

- ① 私達にEボートの経験がないため、事前に試乗して安全性などを確認する必要がある。
- ② 指導者と協力者を見つける。長岡市に指導者がいないため、他の市や他の県から招く必要がある。
- ③ 安全対策が不十分だったため、指導者から操作方法や水難事故防止の講習をうける必要がある。
- ④ 活動資金の工面について。市からの補助が得られるかどうかを確認する。参加費を徴収する必要があると考えられる場合は、徴収する金額の見積もりを立てること。
- ④ 河川の使用許可とEボートの借用許可を得るためには、まず指導者を確保し、企画書をまとめてから河川事務所に訪問して話し合いをすること。

3.1.2 長岡市民協働センター高橋秀一氏へのヒアリング

11月15日 上川西小学校の信濃川下りを支援した長岡市民協働センター高橋氏に、「Eボートによる川下りを実施するにあたり、行政および市民協働センターとしてどのような点に留意したら良いか意見を聞く」ためにヒアリングを行った

図表9 高橋氏へのヒアリングの様子



以下、長岡市民協働センターでのヒアリングの質問事項とそれに対する高橋氏のお話を示す。

① 河川とEボートの借用許可はどのようにして得ればよいか。

安全性を保障し、反対意見が無いようにする。地域との協力体制を築く。自分たちがEボートを体験する機会を設ける。Eボートのコーディネーターである山下さんと話し合う。

② 指導者について。

Eボートを行うには指導者が必ず必要である。1艇につき二人必要である。長岡市には指導者がいないため、他から招くことになる。(見附市、南魚沼、東京都など)

③ 自分達で指導者の資格を取得するにはどのような方法があり、費用は幾らか。

Eボートインストラクターになるための講座を受ける。インストラクターになると、Eボートをレンタルすることが出来て、人を乗せてクルーズすることが可能となる。この講座はステップ2までなら見附市で受講が出来て、地域交流センターでも行われている。

④ Eボートのイベント参加及びイベント情報を得るには。

Eボートのイベントは、新潟県では寺泊で行われており、2月には国営越後丘陵公園で雪上Eボートが開催される。また、群馬では6、7月に開催されている。イベント情報についてはEボートに関するWebサイトを見る。

⑤ 資金の工面について。

市からの援助、大学の補助金、参加費の徴収などが考えられる。

⑥ 安全対策策が不十分と指摘され、ライフジャケットを着用しようと考えているが、他に留意する点はあるか。

特になし。

⑦ 須川をボートで何度か往復する計画だが、川下から川上にボートを運ぶときはどのように運ぶのがベストか。

Eボートの空気を抜き、折り畳み、軽トラックで川上に運搬する。

⑧ 川下り本番の前に一度須川にEボートを浮かべてみようと考えているが、その時にも指導者は必要か。

練習でも指導者は必要である。安全性を確認するためにも、試乗は行った方が良い。

市民協働センター高橋氏へのヒアリングから明らかになった課題は、以下の5点である。

① 安全性の確保をすること。

② アドバイザーの確保をすること。

- ③ 地域との協力体制を確立すること。
- ④ 指導者を確保すること。
- ⑤ イベントへ参加し、体験をして安全性を高めること。

なお、資金の工面は、市からの援助や大学の補助金を受けられるか確認すること。

3.2 昨年度の活動

Eボートの借用許可を得て企画を実行するためには、解決しなければならない6つの課題があることが、昨年度の活動から明らかになった。これらの課題は、次の6つの方策によって解決できる。

- ① Eボートのイベントに参加して事前に訓練を受ける。ライフジャケットを必ず確保する。
- ② Eボートの貸し出しについて、インストラクターの山下さん、市役所と相談をする。
- ③ 神谷地域の行事に参加して、神谷の人達と交流する。
- ④ インストラクターを山下さんから紹介していただくか、自分たちで探す。
- ⑤ 訓練の一環として、事前に我々がEボートを体験する。
- ⑥ 市からの援助か大学の補助金を得られないか検討する。子供たちが参加しやすくするために、参加費は徴収しないようにする。

3.3 今年度の取り組み

昨年度の活動から明らかになった6つの課題を解決し、Eボートでの須川下りを成功させるために、今年度は以下の5つの取り組みを行うことにした。

- ① Eボートのイベントに参加する
- ② 指導者を見つけ、取組への協力を要請する
- ③ 安全のために救助訓練をする
- ④ 資金調達の検討
- ⑤ 河川使用許可申請について調査する

イベント参加については、時期を逃してしまい、参加できるイベントが見つからず、実施できなかった。指導者については、市役所の高橋さんの紹介でEボートのインストラクターである山下さんに務めてもらうことになった。③、④については、実施するには相当の労力と時間が必要であると考えら、今年度も計画を実現することができなくなる恐れがあった。そこで、計画実現のための具体的な問題点を洗い出すための試走をゼミ生主体で行うことで、大学の予算で川下りを実施するように計画内容を変更した。

3.4 河川使用許可の取得

須川の管理を担当していると思われる信濃川工事事務所越路出張所を7月28日に訪問し、河川の使用許可申請に必要な事項のヒアリングを行った。

その結果、須川は一級河川であるが信濃川の支流であるため、事務の取扱いは信濃川工事事務所ではなく、長岡地域振興局の地域整備部庶務課行政係が行っていることが分かった。

8月7日に長岡地域振興局を訪ねた。その結果、河川の一時使用届出書を下見と本番のそれぞれについて実施一週間前までに長岡大学の代表者名（すなわち学長名）で長岡地域振興局に提出するだけで良いことが分かった。また、計画実施日を変更せざるを得なくなった場合も、局に直接連絡をするだけで良いことが明らかになった。

なお、河川の一時使用届出書の提出には、大学長の印鑑が必要であることから、急きょ学長印をもらう手続きを行い、事務の方々の協力で数日のうちに決裁がおり、10月5日に予定していた下見会実施に間に合うように一時使用届出書を提出することができた。

3.5 下見会実施に向けた活動

須川でEボートを使った川下りを行うにあたり、私たちはEボートの経験がなかったため、体験する必要があった。

そこで、インストラクターと学生のみで、Eボートの操作を学び、須川の危険個所や安全な乗り降り場所の確認などをする試走を下見会とし、神谷の方々にも試乗してもらい、来年の川下りに向けて意見を求める試走を本番として、準備を進めていった。

3.5.1 山下氏とのテレビ電話会議

7月29日に、Eボートのインストラクターである株式会社地域交流センター企画取締役の山下匡紀氏と Skype を使って、Eボートを使用した須川の川下りについての事前打ち合わせを行った。

打ち合わせでは、Eボートの手配、安全面、インストラクターの手配、保険、来年以降の取り組みについてなどを話し合い、下記のご指摘を受けた。

① Eボートの手配

「安全面、インストラクターがつくこと、保険」について記載した詳しい企画書を越路支所に提出する。

② 安全面

救助訓練など安全指導は当日でよい。陸上に救助要員を一名配置すること。インストラクターと数人で試走し、須川の危険個所や安全な乗降場所のチェックを行う。

③ インストラクターの手配

山下氏から長岡市近辺のインストラクターを手配していただくことになった。

④ 保険

イベントの時は、保険をかけることが必須である。しかし今回の場合は、学生が大学の保険に加入しているので考慮しなくてよい。来年以降、神谷の方々を主体とした川下りを行う場合は、保険について考慮しなくてはいけない

⑤ 車の手配

Eボートを運搬するための車の手配が必要である。

⑥ 来年以降の取り組みについて

神谷の方々を対象とする場合は、学生がリスクマネジメントできるように講習会(川に学ぶ体験協議会、RAC 養成講座など)への参加を考える。

神谷の方々から自発的に参加してもらうためには、興味を引くキーワードが必要である。私たちが面白いと思えるアイデアを積極的に出す。神谷のお母さんたちに来てもらえるような場作りをしていく必要がある。今後につなげていくためには、若い人がやっていくプログラムを念頭に置く。川の上から地域を見ることによって、神谷の方々に何を感じてもらえるのか考える。神谷の方々に楽しんでもらうことが重要である。

⑦ ゼミメンバー同士の情報共有を図る

持っている情報にばらつきがあると、お互いの持っている情報を合わせるために時間をとってしまう。情報を合わせる時間を減らすことと、活動に参加した人と参加できなかった人との情報の差を埋めるためには、メンバーなら誰でも見られる状態で随時情報を共有していくことが大切であるとのこと指摘を受けた。

図表 10 山下氏とのテレビ電話会議



3.5.2 サイボウズ Live を使った情報共有

テレビ会議で山下氏から指摘を受けたゼミメンバー同士の情報共有は、様々なツールを検討した結果、サイボウズ Live を用いることにした。

なぜサイボウズ Live なのかというと、サイボウズ Live は、チームの情報共有に必要な機能が一つになった総合コラボレーションツールであり、招待されたメンバーだけで情報共有ができるグループスペースを簡単に作ることが可能である、ことによる。

グループの主な機能は、共有フォルダ、掲示板、イベント、TODO リスト、リンク集、グループ内検索である。その他に、チャットや新着情報のメール通知、Facebook や Twitter との連携などの機能が備わっている。サイボウズ Live を使用する利点としては、情報が整理しやすく探しやすい、誰でも簡単に使えることがある。

サイボウズ Live を使うことで、取り組みの進行状況やデータをネット上で確認することができ、活動がしやすくなった。長期の休み期間でも、サイボウズ Live を使用することで、連絡を取り合い、情報を共有することができた。また、今までの活動の振り返りをする際にも、データとして残っているので整理しやすかった。

図表 11 サイボウズのホームページ画面



3.5.3 下見実施に向けた最終打ち合わせ

9月19日、山下氏と下見実施に向けた最終打ち合わせを長岡大学のゼミ室で行った。そこで、Eボートを借りるためにすべきこと、役割分担を明確にすることおよび安全でかつ楽しい川下りを実施するために準備すべき事項についてご指摘を受けた。

Eボートを確実に借りるためには、企画書、緊急連絡網、タイムテーブルを作成し、市役所に提出することが重要ではないかとの指摘を受けた。そこで「企画書に記入すべき内容、緊急連絡網・組織図、タイムテーブル」について検討を行った。検討を行った内容のまとめを以下に示す。

① 企画書に記入すべき内容

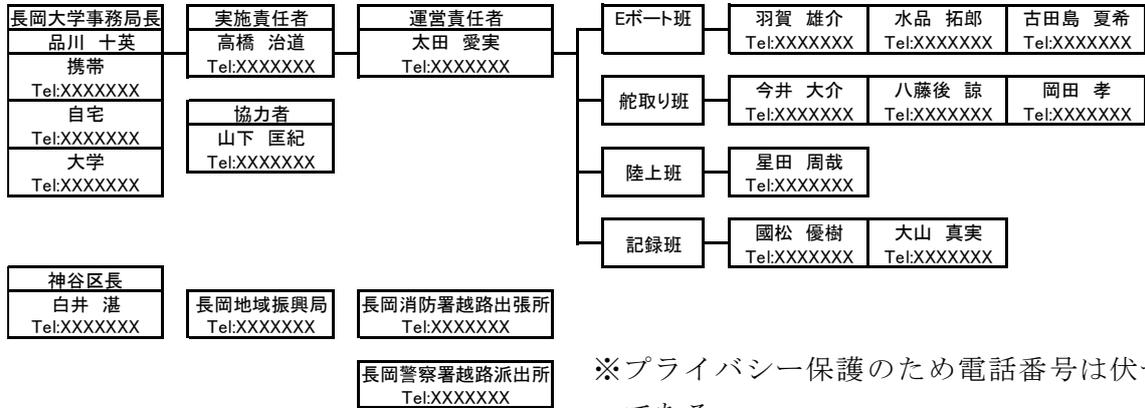
目的、実施概要(乗船人数、開催場所(地図もつける)、主催、協力、実施内容、問合せ窓口など)を、「いつ、どこで、誰が、何をどうやって行うのか」に沿った小項目を立てて分かりやすく書く。その他、開催までの具体的なスケジュール、当日のタイムテーブル、開催場所での人とボートの配置と駐車場に関するレイアウト、リスクマネジメント、緊急連絡網・組織図、参加者名簿、収支計画などを記載する。協力団体として長岡市を必ず記載できるように長岡市に働きかける。

② 緊急連絡網・組織図

万が一水難事故などがあった場合に連絡をとれる組織構成を考え、それを組織構成図にして表す。その際に消防署や警察署の電話番号も必ず記載する。

図表 12 緊急連絡網・組織図

Eボート 緊急連絡網



※プライバシー保護のため電話番号は伏せてある。

③ タイムテーブル

当日、全体と各班がどのように動くのか把握するため、班ごとのタイムテーブルを作成する。

図表 13 試走タイムテーブル

長岡大学高橋ゼミナール 須川のEボート川下り 試走タイムテーブル(2014/10/5)

時間	全体	場所	Eボート班	舵取り班	陸上班	記録班	運営管理者
担当者			古田島、羽賀、水品	今井、岡田、八藤後	山下さん、星田	地域連携研究センター、大山、國松	太田
11:00	ゼミ生集合	長岡駅大手口					
12:00	集合、自己紹介、行程説明	須川 神谷橋	事前にボートを現地に運搬(高橋先生)			撮影、メモ	タイムキーパー
12:10			運搬車発着場所確認	ボート離岸場所確認	コース確認	〃	〃
12:20	ボート組立、安全指導、乗船指導			インストラクターに付き活動		〃	〃
13:10	乗船(13名で2~3回に分けて乗る)、600mで何ができるのか考えながら乗る			舵取り、先頭水先案内	ボート並走、監視	〃	〃
15:10	下船	須川 神谷橋	ボートを公園に運搬、片づけ指示だし	ボート着岸場所確認		〃	〃
15:20	ボート洗浄レクチャー、片づけ	公園	洗浄後、ボートを返却まで保管(高橋先生)			〃	〃
16:00	本日の振り返り、本番に向けての打合せ	神谷公民館(予定)					〃

3.5.4 Eボート操船の役割分担

山下氏のアドバイスに従って、Eボートを操船する際の役割分担を6つの班構成にして行うことにした。

① Eボート班

Eボートの手続き・運搬・管理を行う。

② 舵取り班

当日の舵取り等をインストラクターと連携して行う。

③ 陸上班

リスク管理として救助できるように川沿いを車で並走。消防・警察・河川事務所への連絡。

④ 広報班

マスコミへの連絡や取材対応・地域への呼びかけ。

⑤ 記録班

写真などで当日の様子を来年に引き継げるように記録を残す。

舵取り班は、来年に引き継いでいくために3年生が中心となって担うこととした。

4年生はサポートとして、Eボート班・陸上班・運営管理者に分担し、広報はゼミ生皆で行い、記録班は地域交流研究センターにお願いすることにした。

3.5.5 使用する備品

Eボートで川下りを行うには、以下に示す8点の備品が必要である。それらの手配について検討を行い、準備することにした。

① スローロープ

救助する際に使用するロープで、水に浮かぶ特殊なロープである。山下氏から用意して頂く。

② ライフジャケット

安全を確保するために、乗船人数分と陸上班分を用意する。Eボートを借りる際に付属するので、長岡市から借りることとなる。

③ パドル

Eボートを漕ぐために必要な備品で、Eボートを借りる際に付属するので、長岡市から借りることとなる。

④ バケツ

Eボートを片付ける際に水を汲むために使用する。ゼミで用意する。

⑤ 雑巾

Eボートを片付ける際に汚れを拭くために使用する。ゼミで用意する。

⑥ ブルーシート

Eボートの組み立てや片付けの際に、Eボートが傷ついたり、汚れないようにするために下に敷く。2~3畳の広さのものが必要である。ゼミで用意する。

⑦ 虫よけスプレー

川辺には蚊やダニなどの虫がいるため、虫刺され防止に必要である。ゼミで用意する。

⑧ 救急箱

万が一、怪我をした場合に手当ができるよう用意しておく。大学から借りる。

3.5.6 川下りの中で出来ることを考える

来年以降に向けて、ただEボートに乗るだけでなく、どのようにしたら神谷の子供たちや大人が楽しめるのかを考える。

Eボートは、火とお酒以外はOKであることから、600mの川下りの中で出来ることは何かを自由な発想で考える(例:ギターの弾き語り、橋の上からクイズを出題など)。場合によっては、コースの長短の見直しもする。

3.5.7 収支計画・報告

以後の活動の参考となるように、インストラクターの経費以外の全てを予算付けし、この活動に必要な経費を明確にするのが良いと山下氏からアドバイスがあった。

3.6 下見会実施

10月5日に、本番に向けた下見会を実施した。この下見会は、

- ①Eボートの操作を体験し、慣れる
- ②危険箇所等の川の状態の確認
- ③本番実施に向けた問題点の洗い出し

の三点を目的としたものである。

当日は、雨で須川が増水したために試験下りを行うことはできなかった。そのため、神谷集落センターの2階の広間をお借りして、本番に向けた打ち合わせとEボートの操作を学ぶことになった。

下見会でインストラクターをしていただく犬塚守明氏とゼミ生は初対面であったため、まず自己紹介から始まった。その際、山下氏からの提案で親しみやすいようにニックネームも各々紹介していった。この活動をする上での思いやEボートの「E」の意味などを語り合い、自分達の取り組みや取り組みに対する思いを確認し合った。

その後、犬塚氏の指導の下で、Eボートの組み立て方、たたみ方、ライフジャケットの着け方、パドルの持ち方・漕ぎ方を学んだ。昨年はEボートを借りることができなかったため、実物を前にするのは初めてで、予想以上にEボートが大きく、組み立てるのも大変なことを体験した。三つ折りにされてコンパクトに収納されていたEボートを広げ、専用のポンプでEボートと腰かける為のベンチにゼミ生全員で代わる代わる空気を入れていった。空気を入れたEボートは、指ではじくとゴム製とは思えない金属音が鳴り、丈夫さが

感じられた。ベンチの取り付けも含めて、大体 30 分程で組み立て終えた。

ライフジャケットを身に付けて E ボートに乗り込んだ後、パドルの持ち方を教えていただき、床の上ではあるが掛け声を掛けながら E ボートを漕ぐ練習を行った。また、陸上班は、スローロープを使った救助の練習も行った。その後、E ボートのたたみ方を教わり、E ボートから空気を抜き、三つ折りにしてたたみ、組み立て前の状態にした。

片づけを終え、本日の振り返りと 18 日に行う試走についての打ち合わせを行った。打ち合わせでは、本番の流れや服装、E ボートの発着場所の確認、当日に配布する須川のマップの作成について話し合った。

E ボートを目にし、触れるのは初めての経験であったために、最初は戸惑いがあった。しかし、組み立てているうちに次第に慣れ、パドルを持って乗り込む頃には、ワクワク感でいっぱいになった。

この下見会で、自分達の活動に対する思いや方向性の確認を行い、実際に E ボートに触れたことで、本番に向けて士気が高まったように感じられた。

図表 14 E ボート組み立ての練習



図表 15 完成し、説明をうける



図表 16 床の上で E ボートに試乗



図表 17 振り返りと打ち合わせ



3.7 E ボート借用

昨年度は、越路支所に保管されているEボートを貸してもらうために活動したが、「安全に問題がある」と「計画の目的がわからない」という理由で貸してもらえなかった。

今年度は、Eボートのインストラクターで株式会社地域交流センター企画取締役の山下匡紀氏と2回にわたり打ち合わせを行い、計画を練った。その結果Eボートを確実に借りるためには、企画書、緊急連絡網、タイムテーブルの3点を作成し、市役所に提出するのが良いことが明らかになった。また企画書には、リスクマネジメント、協力団体名(協力として長岡市は入れた方がよい)、個々の役割分担を明確にした5つの班(Eボート班、舵取り班、陸上班、広報班、記録班)の役割とタイムテーブルも含めると良いとの指摘を受けた。

具体的な活動計画ができた時点で、市民協働センターの高橋秀一氏の助言を受けながら越路支所に再度連絡をとった。しかし、計画の主体を神谷の子供たちから大学の学生に変更したことから、防災訓練という側面が薄くなってしまったために、防災用として所有している越路支所のEボートは貸すことはできないと断られてしまった。また寺泊にもボートはあるので、レジャーやスポーツで使うのならそちらにお願いしてくれと言われた。

防災での利用や地域活性化の一手段としての活用を考えた場合、神谷が所属する越路支所のEボートを借りることに意義があると考え、是非とも越路支所からお借りしたかった。しかし、これ以上越路支所にこだわっては昨年の二の舞になってしまい、Eボートを使って須川下りをするという当初の目的を今年も達成できなくなってしまうと判断した。そこで、寺泊スポーツクラブ「てらスポ!」から借りることに急遽方針を変更した。

すぐにEボートの担当者である竹田氏に電話でお願いしたところ、「Eボートを借用するには長岡市スポーツ振興課に借用届けを提出すればよい」との返事をいただいた。長岡市に届けを提出し、後日竹田氏から大学までEボートを運んでいただき、無事借りることが出来た。

もちろん本番終了後は、Eボートを寺泊スポーツクラブまで運び、竹田氏にお礼を言いEボートを返却した。

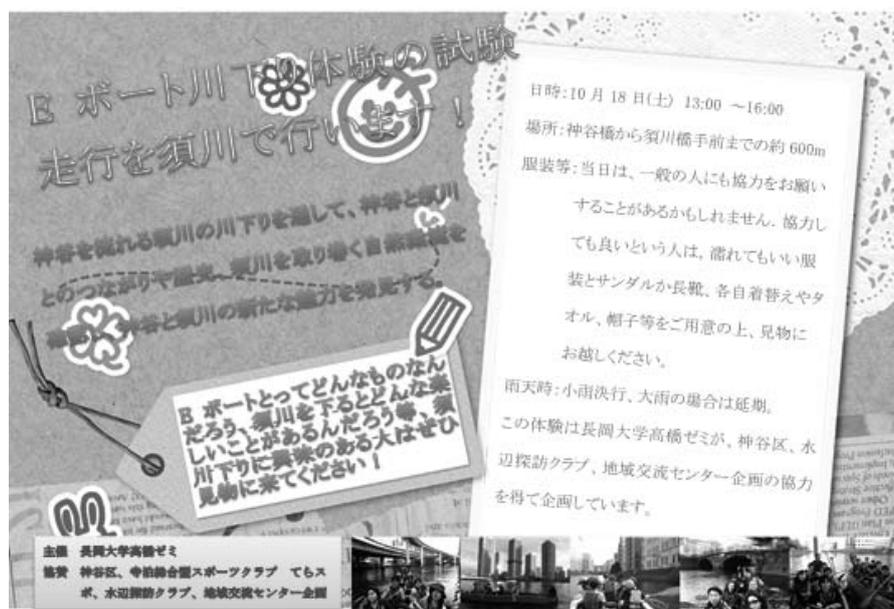
3.8 広報活動

10月18日の試験走行のチラシを作成・配布し、神谷の方々へ参加呼びかけを行った。情報を

- ① イベントのタイトル(目を引くためにある程度目立たせる部分)
- ② ポイント・目的(一番強く伝えたいグループ)
- ③ 日時・場所(小さくても入れておく必要のあるグループ)
- ④ 連絡先(控えめでも良いグループ)

の4つにグルーピングし、重要度に合わせて文字の大きさやレイアウトを調節した。より目を引くように白黒を避け、デザイン性のあるテンプレートと写真を使用し、Eボートのイメージが膨らみやすいようにした。

図表 18 作成した広告



3.9 Eボートでの須川下り本番

3.9.1 タイムスケジュール

試験走行の本番は、10月18日(土)に実施した。10月5日の下見会では、自分たちで実際にEボートに乗ってみるという予定だったが、須川が増水したために神谷地区の公民館で講習会だけを行うことになり、試乗できなかった。インストラクターの犬塚氏の指導のもとで、その講習会で教わったことを思い出しながらEボートを組み立てた。

その後、事前に設定していたタイムテーブルに従って、自分たちが乗船練習のために最初に試乗した。タイムテーブルの主な役割は、スケジュールの流れの把握とスケジュールの流れに沿って各班が行う事項を明確にすることである。全体と各班がどのように動くのか把握するために、班ごとのタイムテーブルを作成した。

図表 19 本番当日タイムテーブル

時間	全体	場所	Eボート班	舵取り班	陸上班	記録班	運営管理者
担当者			古田島、羽賀、水品	今井、岡田、八藤後	山下さん、星田	地域連携研究センター、大山、國松	太田
10:30	ゼミ生集合	長岡駅大手口					
11:00	全体集合、組み立て、乗船指導	須川 神谷橋	事前にボートを現地に運搬(ゼミ生)、運搬車発着場所確認	ボート離岸場所確認	コース確認	撮影、メモ	タイムキーパー
11:50	乗船練習					〃	〃
13:00	乗船(13名で2~3回に分けて乗る)、600mで何ができるのか考えながら乗る			舵取り、先頭水先案内	ボート並走、監視	〃	〃
15:00	下船、ボート洗浄レクチャー、片付け	須川 神谷橋、川辺の道路	ボートを川辺の道路に運搬、洗浄後のボートを公民館に運搬	ボート着岸場所確認		〃	〃
15:40	本日の振り返り、本番に向けての打合せ	神谷公民館(予定)				〃	〃

3.9.2 川下り

当初の予定では、この試験走行ではゼミのメンバーだけが試乗して、何ができるかを考えるつもりだった。しかし来年も活動を継続していくなら神谷地域の方々からも試乗してもらい、意見や感想をもらうことも必要だとの山下氏からの助言により、地域の方々にも実際に乗ってもらうことにした。

図表 20 最初にゼミ生が試乗



図表 21 神谷の人たちと試乗



ボート上の人員配置としては、エンジン（起動力）となる中央の4人を我々学生が担当し、その前後に地域の方を乗せ、最後尾をインストラクターの犬塚さんに担当していただいた。この体制で神谷橋から須川橋手前の1往復ごとに乗船メンバーを変え、計6回Eボートで須川を下った。

神谷の人たちからは、7歳の男の子から80歳のおじいさんまで述べ30名の方から体験下りをしてもらうことができた。

今後の活動の参考にするために、乗っていただいた神谷の人たちにアンケートに協力してもらい、乗った感想などを書いていただいた。いただいた感想には、「とても楽しかった」や「またやりたい」などの声が多く寄せられた。

アンケートに寄せられた意見と感想は、次の通りである。

- ・子供の頃を思いだし、たのしかった。
- ・川あそびサイコウ
- ・須川の中からの景観は初めてです。
- ・川の深さも色々でスリルがありました。
- ・川底のゴミが目につきましたので掃除も必要かと思いました。
- ・(ボートに乗るのは)20代に海でボートに乗って以来であったが、久しぶりの感触が楽しかった。
- ・生まれてはじめてボートで川下りしました。冥土の土産になります。
- ・楽しかったけど疲れた。おさかなもいた。
- ・様々な情報があり楽しかった。
- ・今度はガイドがいるともっと楽しくなると思った。
- ・川面上から見る様子は、いままで感じた事のない体験ができて良かった。

- ・来年は、イカダとEボートで楽しくなりそうです。よろしく。
- ・まさか私が乗せてもらえるなんて。
- ・とても楽しく、(船の上で)唄まで歌えてうれしかったです。
- ・孫にも乗せてやりたいです。
- ・もっと大勢の人たちも参加して楽しくできたら良い。
- ・乗員が号令に合わせてボートをこぐことが大切と思いました。

図表 21 アンケート用紙の内容

アンケート調査にご協力をお願いします。

1. 性別
男 女

2. 年齢
 歳

3. Eボートに乗った感想を聞かせてください。
とても楽しかった あまり楽しくなかった
楽しかった 楽しくなかった
わからない

4. また Eボートに乗ってみたいですか？
はい いいえ

5. 気づいた点やご意見・ご感想があったら記入してください。

ご協力ありがとうございました。

長岡大学
高橋ゼミナール

本番でのこの活動にはNHKから撮影隊が入り、10月22日の「クローズアップ現代“若者が変える”ふるさと“のかたち”で放映された。

3.9.3 本番のまとめ

まず、昨年から取り組んできた E ボートによる川下りを達成できて良かった。これも神谷の人たちをはじめとする、多くの方々が協力してくださったおかげである。そして、何度壁に阻まれても、私たちが最後まであきらめずに取り組んできたからだと思う。初めて行った企画であったために我々の知らない部分が多く、なかなかうまくいかなかったことも多かった。しかし、今回の企画を達成できたことにより、様々な課題や可能性を発見する力が付き、成功までのプロセスをおおよそ掴むことができた。

下見会の時は天候が雨天と最悪のコンディションだったが、本番当日は晴れだったため私たちも神谷地区の方々も気持ちよく川下りに取り組めたので良かった。また少ない時間を有効活用できたこと、学生たちが一丸となって後片付けを含め、取り組めたことも良かった。このゼミ活動を通していかに事前の準備、対策、連携することがいかに必要かということ学ぶことができた。今後の活動は、これらで得たことを生かして取り組んでいくことができる。そして一番良かった点は神谷の人たちにとっても楽しんでもらえたことである。

図表 22 E ボートを水拭き



図表 23 後片付けの様子



3.9.4 今後の活動（課題）

来年に向けては、神谷のいかだとのタイアップやほかの地域との連携を取って、もっと上流から川下りをしてみるといった企画もあがっている。そのため来年度以降は、私たちだけでなく、神谷の方々のアイデアも盛り込み、一緒に計画し、神谷の年中行事の一つになったらよいと考える。

今回は学生たち主体で川下りを行い、ボートは寺泊から借用したが、次回は越路支所のボートを使い、もっと多くの方々に乗ってもらえるような企画にしていけたらいいと考えている。また、アドバイザーの方たち（神谷区長さん、ながおか生活情報交流ねっと理事長の桑原さん）からは、普段見ることのない川からの景色を見ることにより須川に対する認識が変わった、連携がうまくいっており全体的にスムーズに行動でき、イベントサポートの力が見事に発揮されていたなどがあげられた。

今後の活動では、E ボートを継続して行うことにより地域住民との交流を更に深めることが期待できる。今回は初めてだったので経験することが目標であったが、次回からは、リード・コントロール（乗船チーム編成のリードなど）をすることにも挑んだらもっと楽

しくなるのではないかと思った。

3.9.5 経費

ご協力頂いたインストラクター2名の謝金・交通費、そして学生の交通費（ジャンボタクシー使用料、自家用車使用の際のガソリン代）を含んで、約10万円となった。

今回はEボート自体の借用代、郵送費は掛かっていない。

3.10 長岡市への提言

Eボートに人を乗せるためにはインストラクターが必ず1人ついていないといけないルールになっている。しかし、長岡市は何艇かEボートを所有しているが、そのインストラクターが1人もいない。安全性が高く簡単に操作できることがEボートの長所であるのだが、インストラクターがいなければ使用することが出来ず、ボートを使った計画や行事の実施ができず、市民に広めることも難しいと考える。以上のことから、長岡市はEボートのインストラクターを養成する施策を考えるよう提案したい。

また、寺泊スポーツクラブのボートは年に何回か使用しているが、防災用を謳っている越路支所のEボートはいつ使っているかわからないし、越路地区の住民の中でEボートの存在を知り、ましてや操船のできる人は皆無とわかっていい状態ではないかと考える。防災の視点での利用を考えたら、常日頃からEボートに触れ、操作に慣れておくことが重要であると考え。さらに、ある程度使っていなければ経年劣化による破損箇所に気づくこともなく、災害でいざ使おうとしたときに使えないなんて事にもなりかねない。以上のことから、越路支所の活用方法をもう一度見直し、越路地区の住民がもっと気軽に活用できるシステム作りをすることを提案したい。

4. チューリップ

4.1 新潟県初のチューリップの開花地・神谷

私たちが神谷でチューリップの栽培活動をしている理由は、神谷が『新潟県チューリップ初開花地』であるからである。しかし、神谷の方々はもとより県内の多くの人が、この事実をほとんど知らない。そこで神谷の魅力を引き出し伝える活動の一環として、私たちがチューリップを植えることで、神谷の魅力の一つとして多くの人に知らせることができるとは思わないかという思いから始めた活動である。

1904年にチューリップを新潟県で初めて咲かせた人物は水島義朗氏である。水島義朗氏は、高橋九郎氏から譲り受けた球根を新潟県三島郡来迎寺村の自宅の庭で立派に咲かせた。これが、新潟県で初めて咲いたチューリップである。この後も水島義朗は東京妙華園やオランダのクレーラー商会から球根を購入し、明治末には100品種余りを試験栽培した。

このことを知った私達は、ゼミ活動としてこの歴史を多くの人に知ってもらうために活動をしている。

植栽活動は、2012年の秋から行っている。2012年11月に植えた約1000個の球根は、花壇に植えた球根の一部が芽をださなかったものの、プランター植えた球根は翌年2013年の春には綺麗に開花し、神谷遊園地を鮮やかに彩った。

5月の初めに花を切り落とし、球根の育成に努めた。6月末には、育成した球根を掘り出し、次期の植栽に向けて、乾燥させ秋まで保存した。掘り出した球根は、小さいものを含めて約2000個ほどであった。

2013年10月には、春にとった2000個の球根を花壇に植えた。その際、ぜひ神谷の皆さんと一緒に植栽活動を行いたいと考え、地区の回覧板で植栽活動への参加を呼びかけた。しかし、直前の協力依頼、また平日の昼間の依頼だったのと、あいにくの雨であったため、参加して下さる人は残念ながら誰もおられなかった。

2014年春にはきれいなチューリップが咲く予定であったが、芽の出が悪く、前年度以上に開花が悪かった。

私達も、これまでの先輩の意志を継ぎ、「チューリップ初開花の地神谷」を広める活動に取り組むことにした。今年度もチューリップの植栽活動を行うことはもちろんのこととして、さらに、神谷が新潟県で初めてチューリップの開花地であることがどのくらい知られているかを知るために、認知度調査を行うことにした。

4.2 チューリップ初開花地認知度調査

神谷が新潟県のチューリップ初開花地であることの認知度調査を、以下の方法で行うことにした。

調査対象：丘陵公園のコスモス祭りを見に来た人

調査方法：聞き取り調査

調査日：10月19日

4.2.1 許可申請書の提出

丘陵公園でアンケート調査をするためには丘陵公園側に許可を得ないといけないため、許可申請書を作成し、提出した。また、企画書も併せて提出した。

図表 24 丘陵公園に送った許可証

許 可 申 請 書																									
平成 年 月 日																									
公園管理者 北陸地方整備局長殿	〒940-0828																								
申請者 住所 新潟県長岡市御山町 80-8 長岡大学																									
氏名 高橋治道 印																									
連絡先 _____																									
<p>都市公園法第12条第1項の許可を受けたいので、下記により申請いたします。</p> <p>記</p>																									
行為【種類】	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="font-size: small;">[種類]</td> <td style="font-size: small;">物品販売又は頒布</td> <td style="font-size: small;">競技会</td> <td style="font-size: small;">集會</td> <td style="font-size: small;">展示会</td> <td style="font-size: small;">募金</td> <td style="font-size: small;">著名運動</td> <td style="font-size: small;">ロケーション</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">2</td> <td style="text-align: center;">講習会</td> <td style="text-align: center;">撮影会</td> <td style="text-align: center;">演奏又はコンサート</td> <td style="text-align: center;">調査又はアンケート</td> <td style="text-align: center;">その他</td> <td colspan="2"></td> </tr> <tr> <td colspan="8" style="text-align: center;">(行事名等)</td> </tr> </table>	[種類]	物品販売又は頒布	競技会	集會	展示会	募金	著名運動	ロケーション	2	講習会	撮影会	演奏又はコンサート	調査又はアンケート	その他			(行事名等)							
[種類]	物品販売又は頒布	競技会	集會	展示会	募金	著名運動	ロケーション																		
2	講習会	撮影会	演奏又はコンサート	調査又はアンケート	その他																				
(行事名等)																									
日時又は期間	10月18日 9:30~11:30																								
場 所	国営越後丘陵公園																								
目 的	新潟県チューリップ初開花地認知度を調べる																								
内 容	長岡市が新潟県におけるチューリップ初開花地であることを公園を訪れた人の何%が知っているかを口頭での聞き取りによるアンケート調査を行う。																								
参加者数	4人																								
その他参考となるべき事項																									

備考

1. 申請者が法人である場合には、その法人の名称および代表者の氏名を記入する。
2. 「その他参考となるべき事項」の欄には、次の事項のほか許可申請にあたって特記すべき事項を記入する。
 - (1) 工作物の設置を伴うときは、その工作物の種類、設置場所、設置期間、その他必要事項
 - (2) 変更の許可申請の場合には、既に受けた許可の年、月、日
3. 提出部数 1部
4. 工作物を設置する場合はその規格を明記すること。

図表 25 企画書

行事企画書

各項目の内容を別紙に記述する場合は枠内右下に別紙の番号を書き、別紙の右上部に『別紙〇』（〇は番号）と書いてください。

作成日 平成 年 月 日

<p>1.行事名</p> <p>新潟県チューリップ初開花地認知度調査</p>
<p>2.開催日時及び広告宣伝等の方法並びに開始時期</p> <p>開催日 平成 26年 10月 18日</p> <p>時間 9:30 ~ 11:30 (準備時間を含む)</p> <p style="padding-left: 20px;">10:00 ~ 11:00 (行事本体)</p> <p>準備日 平成 年 月 日</p> <p>時間 : ~ :</p> <p>・広告宣伝等の方法(該当するものすべてに○をつけてください)</p> <p>Web掲載 テラシ 新聞 雑誌 自治体広報誌 テレビCM ラジオCM</p> <p>その他 (特になし)</p> <p>・広告宣伝等の開始時期(許可前に開催告知や参加募集を行うことはできません)</p> <p style="text-align: right;">□別紙()参照</p>
<p>3.行事の目的(申請書記載内容と同じ場合は省略可)</p>
<p>4.行事の内容(申請書記載内容と同じ場合は省略可)</p> <p style="text-align: right;">■別紙(1)参照</p>
<p>5.主催者、後援者、協賛者及び協力者等</p> <p>長岡大学高橋ゼミナール</p> <p style="text-align: right;">□別紙()参照</p>
<p>6.申請担当者名と所属先及び連絡先(申請書記載内容と同じ場合は省略可)</p>

※ 国土交通省国営越後丘陵公園事務所の後援名義使用希望の有無
(どちらかに○をつけてください。行事の内容によっては名義使用を認めない場合もあります)

有 無

図表 26 チューリップアンケート用紙

7.参加費及び徴収方法 410円×3名+210円×1名=1440円 および駐車場310円	【入園料を → 含む・含まない】
8.入場見込み数・参加予定人数 4名	
9.物品販売・配布の予定 なし	□別紙()参照
10.収支予算書 口頭での聞き取り調査の為、特になし。	□別紙()参照
11.使用しようとする区域、施設、借用物品 花の丘	□別紙()参照
12.設置する仮設工作物の内容(都市公園占用許可申請が別途必要になる場合があります) なし	□別紙()参照
13.会場図、マラソン等のコース図	□別紙()参照
14.タイムスケジュール 9:30 ~ 11:30 (準備時間を含む) 10:00 ~ 11:00 (行事本体)	□別紙()参照
15.運営組織図 調査実施者 調査実施責任者 高橋 治道	
16.事故防止対策、要員配置図	□別紙()参照
17.緊急連絡体制図 長岡大学事務局長 品川 十英 現場責任者 高橋 治道 越後公園管理センター 豊田 尚起	
18.周辺地域対策及び交通対策 特になし	□別紙()参照
19.ごみ対策 ゴミが発生する行為は行わない(口頭での聞き取りの為、用紙等が散乱する可能性もない為)	□別紙()参照

4.2.2 アンケート用紙の作成

次にアンケート用紙を作成した。初めはコスモス園を見に来た方に記入式で答えてもらう予定だった。しかしそれでは時間もかかる上、嫌がられる可能性があるという丘陵公園の方からのアドバイスもあり、聞き取り調査に変更した。

その結果、作成したアンケート用紙は聞き取り調査用の形式のものにした。

図表 27 チューリップアンケート用紙

私たち長岡大学の高橋ゼミナール3年生は、長岡市神谷地区が新潟県で初めてチューリップが咲いた地であることを広める活動を行っています。

そこで、長岡市神谷地区が新潟県におけるチューリップ初開花の地であることがどの程度長岡市民に知られているかの調査を行っています。

2～3分のアンケート調査にご協力をお願いします。

1. あなたの年齢、性別、出身地を教えてください。

2. あなたの年齢を教えてください。

3. お住まいはどこでしょうか？県内でしたら、支障がなければ市町村名を教えてください。

4. 長岡市神谷が、新潟県で最初にチューリップが咲いた場所であることをご存知ですか？

知っている 知らない

5. 新潟県で初めてチューリップが咲いたのはいつ頃か、ご存知ですか？

知っている 知らない

6. 新潟県で最初にチューリップを咲かせた人がだれかご存知ですか？

知っている 知らない

ご協力ありがとうございました。

4.2.3 聞き取り調査の結果

10月19日の9時30分から11時30分までの2時間、越後丘陵公園のコスモス祭りを見に来た人に対して聞き取り調査を行った。当日は、無料公開日ということで多くの人が訪れており、78人の人から聞き取り調査を行うことができた。

残念なことに、神谷が新潟県で初めてチューリップが咲いた地であることを知っている人は一人しかいなかった。

図表 28 聞き取り調査の様子



4.3 チューリップの植栽

2012年から、私たちが神谷でチューリップの栽培活動をしているのは、神谷が『新潟県チューリップ初開花地』であるからである。しかし、神谷の方々はもとより県内の多くの人に、この事実は、ほとんど知られていない。そこで神谷の魅力を引き出し伝える活動の一環として、チューリップを植え、広めることで、神谷の魅力の一つとして多くの人に知らせることができないのではないかと考え、取組んできている活動である。

今年、11月18日に神谷遊園地で植栽を行なった。この日はあいにくの天候であったが、前もって作成し、回覧板で回した広告（図表 30）を見てくださった神谷の方4人も一緒に植栽を行ってくださった。

植えたチューリップの球根の数は約1200個で、赤、青、黄色など5種類を左右対称になるように植えた（図表 31）。

また、これとは別にプランターに200個の球根を植えた。

この模様は、新潟日報の記者によって取材され、11月22日に写真とインタビューの様子が記事になって報道された。

図表 29 植栽の様子



図表 30 植栽の広告



チューリップを一緒に植えませんか！！

神谷の皆様、お世話になってます。

私たち長岡大学高橋ゼミナールでは神谷がチューリップ発祥の地であることをアピールする活動の一環として、昨年秋に遊園地にチューリップの球根を植え、春には色とりどりのチューリップをご覧いただきました。

今年も来春に向けた植栽を計画しており、できることなら神谷の皆様と一緒に植栽を行えたらと考えています。

私たちと一緒に球根を植え、綺麗なチューリップを咲かせてみませんか？

皆様のご参加お待ちしております。

植栽予定日：2014年11月18日(火)

時間：午後3時～4時

集合・植栽場所：神谷遊園地

持ち物：軍手、手シャベル、長靴

内容：神谷遊園地にある花壇とプランターに球根を植えていきます。

プランターは25個、一つのプランターにつき20個ほどの球根を植えていきます。

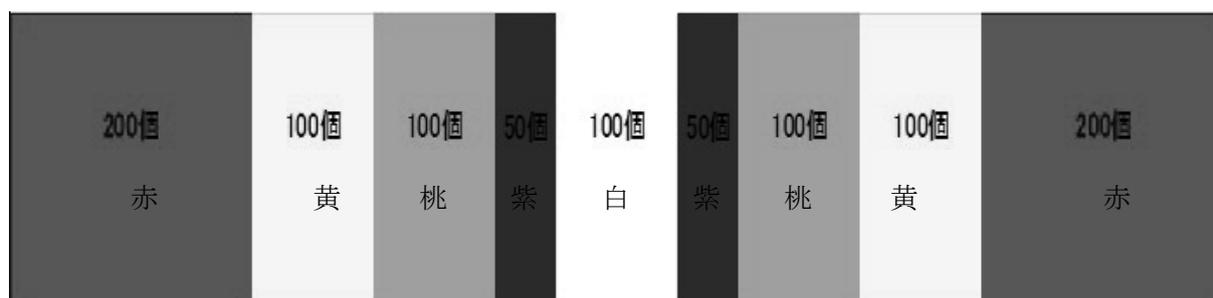
植えたプランターは防災倉庫の下で冬を越し、春に神谷公民館前に設置します。

ご不明な点がございましたら下記までご連絡ください。

お問い合わせ先：[担当者の氏名] 電話：[電話]



図表 31 球根の色の配置と球根数



4.4 植栽活動の今後について

私たちが植栽活動を始めて3年になるが、今後のことを考えると、神谷の人たちによる植栽活動が必要である。というのも、高橋ゼミがこれから先ずっと存続していくことはないからである。高橋ゼミがなくなると同時にチューリップの植栽活動がなくなるというのは避けたい。これまでの3年間の活動の中で、神谷がチューリップの開花地であることが改めて分かり、神谷の人たちにも知られつつある。歴史的事実が風化し、再び忘れ去られてしまうことがあるとしたら、非常に残念なことである。そのような事態を避けるためにも、神谷の人たちが植栽活動を続けていくための方策を早急に考える必要がある。

神谷の人たちが自分たちの手で植栽活動を続けて行くよう、高橋ゼミとしては、今後、

- ① 神谷の人達が、新潟チューリップ初開花の地であること誇りとするよう働きかける、
- ② 植栽を通して「新潟チューリップ初開花の地」であることを守り伝えて行くことの大切さを伝えてゆく、
- ③ 植栽を行う際には、住民の皆さんに協力を呼び掛けるとともに、神谷にある各種親睦団体に対しても協力を呼びかけ、神谷全体の雰囲気盛り立てて行く、

の3点を柱に据えた活動を今後してゆく必要がある。

5. 総評

5.1 各活動の成果・反省

5.1.1 地区行事

i. どんこ田植え

神谷の方々は大勢参加されたが、ゼミメンバーの参加が悪く、神谷の方々との交流を深めることが不十分だった。今後は、もっと積極的に参加すべきだと思った。ここで植えた米を使った収穫祭が毎年秋に行われているが、毎年長岡大学の悠久祭と日程が重なり、参加することができないでいる。自分たちが植えたものを収穫してこそやりがいがあるので、収穫祭に参加するための対策を考える必要がある。

ii. 運動会

昨年より多くの学生が参加することができた。競技に対しても、神谷の方々に負けてなるものかと全力で取り組んだ。運動会終了後の反省会にも参加させていただいて、神谷の方々とお酒を酌み交わし、交流を深めた。

運動会に参加してみて印象に残ったのは、本当に多くの方が参加し、全力で競技に取り組まれていることだった。みなさんととても生き生きとされており、活気と絆の深さが感じられた。また、運動会終了後に、兄会の方々が大量に作ってくださった豚汁を皆で分け合っただけで、心温まる行事だと思った。こういった行事があることで、ご近所付き合いができて、何かあったときにはお互いに助け合う環境ができているように思えた。来年以降もぜひ参加させていただきたいと考えている。

昨年も反省点としてあげられていたが、助っ人としてだけでなく、学生が1つのチームとして参加することができれば、より盛り上げることが出来るのではないかと思う。そのためには、学生の参加人数を増やすことが必要である。また、当日のみの参加だけでなく、事前準備やミーティングにも参加して、学生の視点からのアイデアを提案することで、新しい神谷の魅力発見のお役に立てるのではないかと考える。さらに、学生が競技を1つでも企画運営することができれば、神谷の方々とさらに交流を深められるのではないかと思う。

5.1.2 E ボート

i. 河川の使用許可

最終的には河川使用許可を取得できたが、そもそも須川をどこが管理しているかをしっかり調べて、最初から長岡地域振興局を訪れていれば、もっと早いうちに計画が実行できたのではないかと考える。今後は、どこがどの河川を管理しているのかを事前に調べ、なおかつ電話の時点で使用許可を取得する河川の場所を正確に伝えるなどして、こういった情報のすれ違いが起らないようにしたい。

ii. 下見会

自分達の活動に対する思いや考えを改めて話し合っただけで共有することで、川下りの活動の方向性を再確認することができた。また、インストラクターの指示のもと、Eボートの操作を学ぶことができた。下見実施日は雨天のため、実際にEボートを川に浮かべて乗ることはできなかったが、土手から川の様子を確認し、本番実施に向けた問題点の洗い出しができた。

しかし、活動全体を通して、ゼミ生から覇気が感じられず、「おう！やろう！」といった活気が見られなかった。また、Eボートの「E」にはどんな意味があるのかという山下氏からの問いかけにあまり答えることができず、今までの取り組みに対する姿勢の甘さ、勉強の至らなさを痛切に感じた。自分達が主体となって企画しているということをもっと自覚し、積極的に取り組んでいく必要があることを痛切に感じた。

iii. 広告作成

チラシの色合いがご年配の方には見づらいかもしれないという意見があったが、学生同士の連携がうまく取れず、配布日までに色の調整をすることができなかった。今後は、各自がしっかり連絡を取り合い、情報伝達の不十分さによる活動のずれが生じないようにしたい。また広告チラシなどを作成する際は、色合いを考え、誰からも見やすい広告チラシを作るように心がけたい。

今回の広告作成では、昨年川下りを実施できなかったために自分たちの写真を使用することができなかった。来年以降は自分たちの写真を使い、学生と地域の人々たちが交流していることをアピールする内容の広告にしたい。

iv. 試乗会

昨年から取り組んできたEポートによる川下りを実現することができて良かった。これも神谷の人たちをはじめとする、多くの方々が協力してくださったからである。そして、何よりも我々学生たちが、何度も壁に阻まれても最後まであきらめずに取り組んできたからだと思う。初めて行う企画には、未知の部分が多く潜んでおり、なかなかうまくいかなかったことも多い。しかし、今回の企画を達成できたことで、様々な課題や可能性を発見する力が付き、成功までのプロセスをおおよそ掴むことができた。

下見会の時は雨天という最悪のコンディションだったが、本番当日は晴れだったことにより、私たち学生も神谷地区の方々も気持ちよく川下りに取り組むことができた。また少ない時間を有効活用できたこと、自分たちが一丸となって取り組めたこと、事前の準備、対策、連携することがいかに必要かということはこのゼミ活動を通して学ぶことができた。今後の活動では、今回の活動から得たことを生かして取り組んでいくことができる。そして一番良かった点は、神谷の人たちにとっても楽しんでもらえたことだ。

残念ながら、今年度は当初の目的であった、神谷の子供たちを乗せた川下りができなかった。来年こそ、ぜひ神谷地区の多くの子供たちからEポートに乗ってもらい、川下りを楽しんでもらうと同時に神谷の新たな魅力も発見していってほしい。

川下りをしている人を待っている間、私たちはただ橋の上から眺めているだけだったが、待っている間にできることを何か考え、積極的に地域の方たちとコミュニケーションを取っていかねばいけないと感じた。

5.1.3 アンケート調査

神谷が新潟県で初めてチューリップが咲いた場所であることを知っていると答えた人に、なぜ知っていたかを聞きそびれた。来年度は、この失敗を踏まえた調査活動を考えて行きたい。

5.2 活動全体の成果と反省

神谷地域の活性化を目指すうえで、地域の方々との交流は非常に重要なものである。しかし、昨年度に比べ、神谷地区の行事への参加が減ってしまった。また、参加するゼミ生にも偏りがあった。そのため、行事に積極的に参加している人と積極的でない人とで、それぞれがもっている情報に差が出てきてしまった。その結果、スムーズな話し合いを行う

ことができなかった。ゼミ生全員が意欲的に地域行事に参加し、神谷地域の方々との交流と親睦を深めるようにしたい。

また、ゼミ活動をしていくうえで、3年生、4年生共に、活動計画の詰めが甘く、当初の予定通りに計画を実行することができなかった。大まかな計画は立てたが、それを具体化し、どのような活動をしていくべきか話し合う段階で行き詰まり、実行に移せない期間が多くできてしまった。また、役割分担が曖昧なまま計画を進めようとした結果、ほとんどの学生が人任せになってしまい、特定の人に役割が偏ってしまった。ゼミ生同士の報告や連絡が上手くいかず、作業が後手になりがちで、活動計画に大幅な遅れがでてしまった。

5.3 来年度に向けて

早い段階で活動計画を作成し、計画の実行のためにどのような準備、作業が必要かきちんと話し合い、やるべきことを明確にして活動を行うよう心掛ける。また、あらかじめ各自の役割分担を明確にする。役割分担を明確にすることで、各自が責任を持って活動に取り組んで行くようにする。

報告と連絡に関しては、7月から「サイボウズLive」を導入し、ゼミナール内での連絡やデータの共有をすすめている。来年度以降は、連絡、データの共有に加えて、各活動の報告や進捗状況の確認などにも活用することを考えたい。

謝辞

高橋ゼミナールの活動に関わって下さった神谷の方々をはじめ、多くの方々に感謝します。活動を行っていく中では、至らぬ点などが多々あり、ご迷惑をかけたかもしれません。今年度の反省点を踏まえ、改善できるよう努めていきます。

来年度も神谷での活動を行っていくので今後ともよろしくお願いします。ぜひより多くの行事を盛り上げていきましょう。

お世話になった方々

神谷区長 白井湛様

長岡生活情報交流ねっと 桑原真二様

神谷地域の皆様

株式会社地域交流センター 山下匡紀様

Eポートインストラクター 犬塚守明様

寺泊総合型スポーツクラブてらスポ！様

長岡市立上川西小学校 金子明子様

長岡市民協働センター 高橋秀一様

国営越後丘陵公園 越後公園管理センター 豊田尚起様

引用・参考文献

- ・学生による地域活性化プログラム 平成 25 年度 活動報告書
- ・e ボート公式サイト <http://jrec.co.jp/eboat/>
- ・サイボウズ Live <https://live.cybozu.co.jp/overview.html>
- ・チューリップ。鬱金香一歩みと育てた人たち ― 木村敬助著

平成26年度 学生による地域活性化プログラム
高橋治道ゼミナール活動報告書

【発行日】 平成27年3月26日
【発行人】 内藤 敏樹
【発行】 長岡大学 地域活性化プログラム推進室
〒940-0828 新潟県長岡市御山町80-8
T E L 0258-39-1600 (代)
F A X 0258-39-9566
<http://www.nagaokauniv.ac.jp/>